

広告

企画・制作 LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会



スーパーバイザー
小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科卒。「料理の鉄人」や「ニューデザインパラダイス」、映画「おくりびと」など数多くのヒット作品の企画・構成に携わる。「くまモン」の生みの親でもある。



エリア・コンサルティング

本物のモノづくりを支え発展させ、そこから新しい価値を生み出そうとしているレクサスのブランド思想の一つである「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。岩手県選出の匠、国産漆の伝道師・松沢卓生さんの思いと、完成したプロダクトを紹介する。

「地域のオリジナリティーはあるか?」「コンセプトやターゲットは明確か?」など、サポートメンバーから真剣なアドバイスをが行われ、匠は約一年の試行錯誤を経てプロダクトづくりに取り組んだ。「本当に欲しいくなるプロダクトか?」「地域でのオリジナリティーはあるか?」「コンセプトやターゲットは明確か?」など、サポートメンバーから真剣なアドバイスをが行われ、匠は約一年の試行錯誤を経てプロダクトづくりに取り組んだ。「本当に欲しいくなるプロダクトか?」

「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら「その魅力」を「世界」へ広く発信する。日

プロダクトのスーパーバイザーに、放送作家として多くのヒットを手がけてくまモンの生みの親でもある小山薫堂氏を迎え、隈研吾氏(建築家・東京大学教授)、グエナエル・ニコラ氏(デザイナー)、清川あさみ氏(アーティスト)、生駒芳子氏(ファッション・ジャーナリスト)・アート・プロデューサー)・下川一哉氏(意匠研究所)らをサポートメンバーに発注。第一回となる今回は、全国47都道府県から地域推薦一般公募合わせて52名の若き匠が選出された。

レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援



1月18日、プレゼンテーションにて

錯誤を経てプロダクトを完成させた。

1月18日に都内で行われたイベントでは全国の百貨店、セレクトショップのバイヤー、メディア、デザイン関係者などに向けてプレゼンテーションを実施。世界へ羽ばたく足がかり、ビジネス拡大のきっかけとなるチャンスを手にした。

「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら「その魅力」を「世界」へ広く発信する。日

日本が誇る漆文化を岩手から発信。 「Urushi」を世界の言葉に

松沢卓生 岩手県/国産漆の伝道師

長い伝統と歴史を持つ漆の文化を残す

漆は約9000年もの昔から使われ、日本人の生活・文化に深く関わってきた。しかし、日本の漆の伝統は戦後、安価な海外産の漆に押されて衰退。現在、国内に流通している漆の98%は中国産だという。戦前まで各地に見られた漆掻き職人(漆を採取する職人)の



作品プレゼンする松沢さん

風景は消え、国内最大の漆産地である浄法寺(じょうぼうじ)地域でも、300人いた漆掻き職人は、20数人まで減少した。岩手県庁の職員だった松沢さんは、県の出先機関に異動したのがきっかけで浄法寺漆を知り、国産漆の危機的状況に警鐘を鳴らすべく、2009年に会社を設立。米国のフェッツアー財団から助成を受け「浄法寺漆の海外普及宣伝プロジェクト」なども推進し、国産漆の伝統と魅力を世界へ広く発信し続けている。今までに作った代表作としては、くぎを使わずに木板を



完成プロダクト「角杯セット」(片口と盃)

洗練された角杯セットが生まれた

接合する指物の技術を用い、浄法寺漆で高級に塗装した「Urushio茶筒」。くぎを回して木を削る挽物に比べて木を無駄にせず、効率的な木材資源の活用と環境負荷の低減につながる点が高く評価され、2016年度のグッドデザイン賞を受賞した。デザインと使い勝手を両立させつつ、これまでにない斬新なアイデアで自動車の部品や外国製万年筆にも漆を取り入れるなど、飽くなき探究を追い求めている。松沢さんは「Urushiを世界共通の言葉にしたい」と走り続ける。

国産漆に新たな息吹を吹き込みたい!

今回のプロジェクトで考察した松沢さんのプロダクトは角杯セット(片口と盃)。岩手は古くから南部杜氏の里として知られた酒どころであり、多くの方に日本酒を美味しく楽しんで飲んでもらえるよう、斬新な酒器をイメージした。

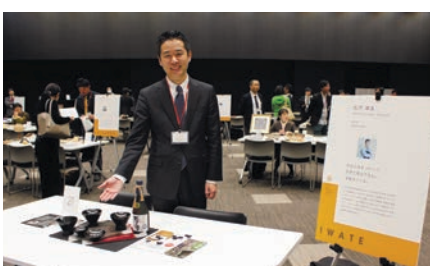
まず松沢さんは、浄法寺漆で昔から作られてきた酒器(片口と盃)をまったく新しいコンセプトで作りを直すことを考えた。片口は外側に注ぎ口が出ているものが一般的だが、思い切って注ぎ口を無くし、器に適切な角度でスリットを入れることでスムーズに注ぐことが可能な片口をデザインした。盃は片口の中にすっぽりと収納でき、持ち運びも可能だ。



サポートメンバー下川氏と共に

エリア・コンサルティングではプロトタイプを見たサ

ポートメンバーの下川氏から「このプロジェクトの定義である地域の特徴を活かしつつ、日本一の浄法寺漆だからこそできる新しい洗練されたデザイン」の角杯セット(片口と盃)が伝統や地域特性を活かし、いかに洗練された収納性の高い酒器セットであるかを説明。多くのバイヤーが松沢さんのブースを訪れた。



プレゼンテーション(商談会)で意気込みを見せてます

デザインの角杯セット(片口と盃)を作って欲しいとアドバイスを受けた。「浄法寺漆の角杯セット(片口と盃)で世界中の人に日本酒の美味しさを知ってほしい。その為にはさらなるブラッシュアップが必要

要」と松沢さんはプレゼンテーションに向けて意欲を高めた。まず改良したが、夫婦や友人同士で日本酒を愉しんでもらうために、2つの盃を片口の中に入れた角杯セット(片口と盃)も制作。これにより1人用と2人用の2つのバージョンが誕生。また日本酒がこぼれないように角度と形状を微妙に調整。片口の部分に千筋を入れることで、より持ちやすくデザイン性の良いものにでき上がった。



岩手県は質・量ともに日本一を誇る漆産地

国産漆の伝統と魅力を世界へ広く発信

キックオフセッションから約一年の制作期間でサポートメンバーからのアドバイスを取り入れて、素晴らしい角杯セット(片口と盃)に仕上がった。また、全国各地の匠との交流もでき、そちらでもコラボレーションして新しいプロダクトも生まれそうだ。松沢さんは「国産の漆が次世代へ受け継がれることを目標としている。漆が普段から使われ、身近な樹木として日本および世界中に広がるのが夢」と力強く語った。



松沢 卓生
岩手県/国産漆の伝道師

1972年岩手県盛岡市生まれ。1995年岩手大学卒、岩手県庁入庁。県職員として地元の「浄法寺漆」の振興担当になったことをきっかけに、県庁を退職し「浄法寺漆産業」を創業。国産の漆を専門とし、自ら精製加工に携わりながら漆製品のプロデュースも行う。国内で使用されている漆の約98%が外国産であることに疑問を抱き「urushi」を世界共通語とすべく国産漆の普及を続ける。

